

広島俳句倶楽部

令和三年六月作品集

奥出雲

高尾ひとみ

奥出雲は、素戔鳴尊（スサノオノミコト）が八岐大蛇（ヤマタノオロチ）を退治したという神話の舞台です。舞台の中心である船通山の麓には盆地が広がり、棚田には人々の丁寧な仕事が見えます。稲が風にそよぎ、家々にも道端にもさまざまな花が咲き、鶯は聞き惚れるほどの声で鳴き、蛙もいたるところに鳴いていました。いにしえの神々もこの山里を歩んだであろうと思いがち、私もこの地に流れているゆつたりとした時の中にいました。

奥出雲まづ鶯の鳴きにけり

花の塵林の風に舞ひあがる

名を知らぬ春禽の鳴く神の山

切り岸の滝は真つ直ぐ落ちにけり

かたかごの花見て越ゆる峠かな

芋環に川はゆつくり流れたり

山里を藤の寺より見おろしぬ

雨雲の過ぎたる里に河鹿鳴く

耳澄ませ橋の上から河鹿聞き

せせらぎに沿うて鶺鴒飛びゆけり

《作品鑑賞》

亜矢

「奥出雲」は、作者が地元の人間ではないからこそ、真っ新な心で当地の自然と向き合っていると感じた。生命力にあふれた動植物の様子は、今も昔も変わりはない。そして未来も変わらないでほしい。そんな思いが伝わってくる作品である。

奥出雲まづ鶯の鳴きにけり

奥出雲が、作者に挨拶をしているかのよう。一句目として、「まづ」が効果的である。

名を知らぬ春禽の鳴く神の山

何の鳥かわからないという、神秘なところが神の山ととても合っている。他の季節の鳥では合わない。

芋環に川はゆつくり流れたり

恐らく、小さな川であろう。上五の「に」によって、景が広がった印象。

このところよく来る石見えこ咲いて
いくたびも老鶯鳴いて石見かな
八重桜散る神山を仰ぎけり
夏の蝶右の谷より来たりけり
松蟬や昔の道は尾根を越え
筒鳥の鳴かなくなれば正午くる
絶え間なく四十雀鳴く真昼かな
露採れば日本海へと風の吹く
神木にまた静まりぬ夏の雨
夏の灯をともして谷の大屋敷

佐保光俊

紫陽花に朝の日差のよく届き
卯の花に明け方の月懸かりけり
降る雨に打たれてゐたり未央柳
十薬の脇を通つて猫の過ぐ
蝶の来る庭の木椅子に腰掛くる
竹林を見下ろしてをり青嵐
桑^{いかる}尾聞き木渡日のなか歩きたる
卯波寄す向うの島へ船渡る
黒南風の吹いて大鳥来るなり
短夜や昨夜の本をまた手にし

村上正人

春の波埤頭へ寄せてしづかなり
初夏の雨の散らせる樟の花
桑桜に母と子の近づいてくる
前を行く人の青梅見上げけり
玄葵近くに寄れば人の来て
はとどぎす鳴く海べりの宿に居り
花菖蒲かすかに水の音のして
菖蒲園座れば風の吹きにけり
梅の実を拾うては子の走りゆく
吾が影を通つてゆける夏の蝶

島尾ひとみ

裏庭の十薬を刈り干しにけり
 山桜桃のジヤムを妹持ち来たる
 リビングの窓に金魚の泳ぎたり
 桑いちご道行く人と食みにけり
 梅一斗今年も夫と漬けにけり
 青梅の匂ひ漂ふ一夜かな
 門柱に雀来てをり夏水仙
 小満のさざ波の立つ水田かな
 朝の日に泰山木の花ひらく
 糠雨に泰山木の咲きにけり

秋沙

夏の朝「渚のアデリーヌ」を聴いて
 薰風や封書を出しに杖ついて
 交番を曲り見えたる草萐
 断捨離を終へたる部屋に南風入る
 友からの玉葱笋に吊るしたる
 一合の米を炊く間の日雷
 テーブルに十薬を活け夕餉食ぶ
 長谷寺の庭の四葩の上に月
 草原に蚊帳吊草のはや咲いて
 交番の日目草の咲き満ちて

阿姫

指先に木洩れ日をして袋掛
 石橋の下の河鹿を聞きにけり
 弁当食ふ泰山木の花眺め
 噴水の飛沫の中を雀くる
 山百合に野辺の送りの風の吹く
 背伸びして道端の枇杷樹ぎにけり
 木々の影映りてゐたる泉かな
 泉の水掬ふ手の平白きかな
 蓮の葉を揺らし白鷺飛び立てり
 バス停に日傘の列のできてをり

あざみ

永き日の医師にもらひし柄マスク

飼育箱の土入れ替ふる四月かな

花馬酔木置かれしままの人力車

診断書卓に置かるる麦の秋

夏の雨二階の部屋に夫のゐて

天井に翅の小さき夏の虫

牛乳をまづ飲み干す子冷素麺

ゆつくりとゼリーをすすする熱の母

入院の母を見送り夏落景

退院の母の夏服腕細し

亜矢

風止みし鐘楼脇の躑躅かな

雛罌粟が空家の庭に咲き群るる

保育所の子の見上げたる鯉幟

社へと上れる道の著莪の花

境内の大樹を掠め夏つばめ

寝ころべば木洩れ日にして樟若葉

小波立つ海を見てゐる梅雨入かな

夜の風に公孫樹若葉のさざめけり

全山の青葉の山となりにけり

老鶯の鳴き続けたる沢辺かな

井藤希

吊忍コーヒーの香の流れ来る

溪流に巨石聳ゆる日の盛

三輪車天道虫の来て止まる

吊橋の高くに見えて滝の音

緑蔭やこのトリックの解けるまで

閑職も今は懐かし草むしり

麦茶飲む検査結果を待つ間

朝刊に蟻の一匹付いてをり

花莫産に紙飛行機を並べたり

夕焼や今ひとたびの隠れん坊

栄吉

新じやがの小粒ばかりの甘辛煮

卵の花や垣根に牛の鼻輪干し

アカシアのこぼれ花踏み橋わたる

蜘蛛の子の行きつ戻りつ草の上

花棕櫚へ一枚石の橋架かる

山城の谷に野いばら咲きつく

沈みゆく夕日の差せる小判草

洗ひ桶ならべ梅雨の間天日干し

蒸し上げて炭に並べる柏餅

枇杷を櫛ぐ一つは草の中に落ち

大橋博子

途切れては続く音読若菜して

子の元に友は越したり榎の花

峡は今煙雨の中や古茶注ぐ

日翳ればどこかがさやぐ青田かな

その村の見えるところの栗の花

螢見にせせらぎに沿ふ道辿る

はうたるの名も無き川に光りをり

大川を風吹き上り桑葚

壁打ちのボールの音す夏木立

風鈴を吊るせば風の吹きにけり

暁子

雪二間積もる酢ヶ湯に泊りけり

山近く来て残雪の見えずなり

竹林に吹き渡りたる初夏の風

母の日に貰ひし花のまた咲いて

あいの風電車は松の林抜け

清流の底の石へと夏日差す

錦川中洲の岩に鷄の群るる

河鹿鳴く淵へと細き滝の落つ

草取の手を休めずに空を見る

サンダルで片蔭たどり戻りたる

新庄憲彦

十薬の雨粒払い摘みにけり

梅雨晴間溪流釣に夫出掛け

鉾杉の先に螢の光りたる

卯波寄す突堤に人立つてをり

真夜中の木々を揺るがす青嵐

車椅子近づけて見る四葩かな

妹と観劇したり梅雨最中

絹莢の筋取りをれば電話鳴る

雨上り歩いてゆけば夏の風

外風呂は清流の横河鹿鳴き

歩きつつ日暮を待ちて螢狩

袋掛一本を終へ移りたる

楊梅の今日一段と色づいて

大鍋を岩に干しあり登山小屋

鈴蘭を行き過ぎてまた引き返す

橋の上日傘傾け行き違ふ

日傘上げ合図をしたる待ち合せ

足もとに咲くごとく散る花柘榴

このごろの天気の話麦茶飲み

海までの砂灼けてをり歩きをり

青田波父の墓から見おろしぬ

蓮の花スクールバスの行き来して

母が家の前の小川に螢とぶ

川に沿ひ螢ゆつくり飛びにけり

一晚で祖父の編みたる螢籠

幼子の玉葱抜いて並べをり

玉葱を奥から詰めて吊るしけり

新じやがを剥いて持たせてくる母

母が家の裏庭の枇杷椀ぎにけり

枇杷食べて懐かしさうに母語る

すみれ

知佳子

ちどり

牛蛙田の一枚に響きをり

思ひきり夏空蹴つて遂上がり

益虫と知りても百足虫打ちにけり

網戸から子を叱る声聞こえたる

生まれたる螳螂すぐに鎌を舐め

ががんばの一本上げし細き足

庭の木の間を縫うて夏の蝶

もつれてはほぐるる光螢かな

田草取終りて腰を伸ばしけり

繫がれしままのボートや秋暑し

友岡崇山子

マネキンの浴衣階下に流れゆく

十葉の匂い車輪の跡深し

水面より異郷に浮かぶあめんぼう

蝸牛二階の壁で待ちすぎて

蟻の道許せぬ気持ち遅んでく

夏の夕島の五時知る笹の音

鹿の子ら突き合い響く石畳

尺蠖は長袖に乘るロープウエー

制服の集う看板小判草

庭園に昼のサルビアだけの色

ふじ女

退院の窓をつばめの通りけり

野球部の早朝のラン青葉して

その家の薔薇に歩みをゆるめたる

夏の鴨風吹く方へ向いてをり

回り道して紫陽花の前に出る

芍薬の音立てるごとく崩れけり

食卓で手紙を書いて梅雨の昼

古書店に長居してゐる梅雨晴間

撫子の向うを貨物船通る

無花果を二つに割つて母と食ふ

松田裕子

岩峯山端より朝日差してくる

小判草揺るる側道走りをり

茉莉花の格子に絡み二階まで

日の差して泰山木の花の見ゆ

花あやめ鉄持つ手を濡らしたる

紫陽花の鉢の並びし無人駅

時鳥向かひの山に啼きにけり

断崖の筈百合海へ向いてをり

岩夏の波音とくに高くなる

青信号日傘の列の続きをり

美耶

水を張る棚田に雲の影流れ

草葎道祖神にと二つ置く

夏蝶のいま大空へのぼりゆく

海原を叩いてゆきし驟雨かな

夏の雨本屋に寄ると電話せり

子に縫ひし浴衣の上げを解きにけり

夕暮れの船宿の釣忍かな

麻暖簾分けていつもの小料理屋

梅雨さぎす露地に生醬油にほひけり

五月雨の明日上がるとふ空を見る

森口良樹

霧雨の藤棚の下しづかなり

制服の吾子の手足や更衣

豆御飯小さき豆も炊き込みて

麴粉あまくあまくと祖父の練り

玄葵鋏持つ人のときに見え

道道の地蔵に著莪の花を活け

焼きたての食パンちぎる五月晴

滝見茶屋靄と飛沫の中にあり

滝壺に子らの寄つては燥ぎをり

綾乃

この畦をもんへの母は歩きたり

故郷の山道をいま遍路行く

このあたり百合の香りの漂ひぬ

木蔭のたわわに実る垣根かな

本を読む視野に入りたる薔薇の赤

紫陽花や娘は若き風となる

竿の光ころろと鳴く青蛙

病室の窓に娘と向日葵と

葭原をかすめ白鷺飛び立ちぬ

大畑恵

夜の窓あけて聞きをり遠蛙

景桜や遊覧船に乘りにゆく

自転車を漕ぎだしてゆく緑の夜

緑の夜眠る赤子は腕ひろげ

あぢさゐの花いつせいに切られけり

ラベンダー植ゑて見てゐる雨の庭

風吹いて馬鈴薯の花咲く日かな

母と摘む青山椒のこぼれたる

噴水をときに揺らせる青景風

桑門わかこ

歓声を聞きたくて吹く石鯀玉

通り雨去りて夕餉の鰹を食ぶ

公園に入るなくなる日の盛

向日葵の横一列に咲いてをり

甚平の父待つてゐる里の家

おやつにと籠提げて摘む蔞かな

土用干母の紬に袖通す

大鳥居くぐれば時鳥鳴いて

黄菖蒲は平家の谷に咲きにけり

宮田保江

始癸待つベンチの湿り時鳥

子燕を母と見上ぐる面会日

端居して星の見ゆるを待つてをり

青梅をひいふうみいと祖母数ふ

妹と聞く母の緑り言夏ともし

六月の車をこぼるる反故の山

六月の日差に母の着物解く

風鈴や廁へ曲がる長廊下

室堂の女四人のサングラス

山野ウタ

花吹雪憂きことのみな消えにけり

遅咲きの桜の散りて海光る

麓から丘までを埋め董咲く

新緑や一輪花の残りゐて

白鷺のまた唐突に飛び立てり

故郷の山よ変はらぬ夏木立

英一

竹落景法事を終へて掃きにけり

紫陽花の小ぶりを運び供へたる

螢籠むかし小さき手で編んで

冷奴窓辺の葱を摘んで添へ

健やかに食べたる今日の冷奴

赤子にと風を入れたる夏座敷

白神陽子

電報の届く六月婚の朝

オレンジの雛罌粟揺るる電車道

笹百合の匂ひ車の窓を開け

舗道にもどくだみの花咲いてをり

桑の実を食へたる雀飛び立ちぬ

上島康子

歌ふやうに話す娘や夏来る

卓上にサボテンを置き梅雨深し

万国旗並ぶゲートや青嵐

枇杷の種かつんと皿に落とすけり

六月の駄菓子屋に寄りくぐりを引く

熊谷ゆり子

二階より遠く近くに栗の花

紫陽花の大花房を活けておく

卯の花のこぼるる山路ひとり行く

ゼラニウムに囲まれてゐる住まひかな

紀英子

寺跡に香る泰山木の花

万緑や出雲の神の眠る杜

緑蔭にいま来た道を振り返る

夏至の日にこたびの旅を終りたる

撫子

六月の白き花咲く山野かな

雨音を聞いて舟漕ぐ梅雨の入り

玉葱の吊るされずらり並びたる

夏野菜育てる母の頼もしく

穂高

刈り草に見え隠れする雀の子

社殿へと上る石段青嵐

散歩道暑さ凌ぎの高架下

青鷺の塑像のごとし川中洲

幹

飯南の森の深さよ五月間

どこからか山鳥の鳴く合歓の花

六月や木綿のシャツの乾きをり

遠藤さつき

夏の瀬戸ゆるやかに舟進むなり

草むらに赤きトマトを見ついたり

玉葱をすばと抜いて六月よ

かこ

六月の払ひし枝に白き花

青葡萄ボーイソプラノ聴いてをり

公園に子らの集まり青嵐

高嶋朔代

花石榴家解体の匂ひくる

青嵐物干し竿の滴揺れ

ばーつとして山梔子の香の中に居る

ちかこ

青嵐の中でしてゐる草野球

カーテンを二枚干したり青嵐

青嵐犬はつらつと散歩させ

みさ子

六月の雨やゆつくり湯に浸り

藤椅子に山を見てゐる母の里

濡れ吹かれ傾き揺るる額の花

やす保

薰風やキヤリーバックのコロの音

夏めくやノースリーブの白き腕

病床の側に麦茶を置いておく

山崎桂子

六月の空ときに雨ときに晴れ

踊り場の蛾壁を離れず影を成す

民

夏風や少し派手目のワンピース

花野ゆく吾を気遣ふ娘居て

津田玲子

生白い足を見つめて夏の朝

阿波久

令和三年五月度作品集より

村上正人 私の選んだ十句

散つてゆく花に来てゐる水辺かな	佐保光俊
川沿ひにゆけば桜の吹雪きけり	高尾ひとみ
父植ゑし山紫陽花は海を向き	あざみ
子の弾ける「子犬のワルツ」夏はじめ	亜矢
ものの影よぎる夏日の山の道	大橋博子
村人と話してをれば時鳥	すみれ
夕桜灯りを点す山家かな	知佳子
赤い薔薇私をお飲みとある薬	ふじ女
ほととぎす朝日の先に聞こえる	美耶
くにぐにの兵士の墓に花の降る	綾乃

高尾ひとみ 私の選んだ十句

散つてゆく花に来てゐる水辺かな	佐保光俊
逃げ水を自転車の列やつてくる	村上正人
父植ゑし山紫陽花は海を向き	あざみ
春の日に照らされてゐる石仏	井藤希
春時雨カフェに紅茶を待ちをれば	暁子
父母の墓うぐひすの声聞こえけり	大畑恵
薔薇の花ハサミ突つ込み手入れする	宮田保江
朝焼の雲の広がる早さかな	山野ウタ
つと針を外せる鱈の口の澄む	綾乃
好きな人に薔薇を贈る夢を見て	阿波久